つたといふことは、早く「チエムベレン」教授などの心付いたところであつたらしいが、證明を具へて說き出されたのは、即ち帝國文學第四卷第一號に於ける上田博士の語學創見中の「P音考」を以て其始めとするのであります。「ハヒフヘホ」古音が、唇部の摩擦音fであつたらうといふ考へは、早く我國語學者も考へついた所で、既に大島正健氏が早く六合雜誌の上などに說かれたところであるが、なほその上に一歩を進で、その實に唇部の密閉音Pであることを說いたのは、實に近世の新らしい語學研究法の賜である。

今日の「ハヒフヘホ」即ち喉部の摩擦音たるhの音が、古くはp即ち唇部の密閉音であつたといふことの論證として、博士のあげられたところは次の四ケ條である。即ち

第一、清音と濁音との音韻的關係。

既にのべた通り、一の清音と之に對する濁音とは、音の出方及び音の出る位地は全く同一で、たゞ一方は聲帶の振動を伴はず、一方は聲帶の振動を伴うために有聲である、たゞこれだけのちがひである。密閉音の側から考へれば、まづ喉部の密閉音は

清音としてk（カ行の子音）があり、之に對する濁音はgである。次で上齒又は上顎のうらの舌のdとで出る齒部又は齒槽部の音では、清音にt（タ）があり、之に對する濁音はdである。さて然らば上下の兩唇の密閉によつて生ずる唇部の密閉音はどうかといへば、即ちまづ清音はpで、之に對する濁音はbであり、云ひ更へれば「ハヒフヘホ」は正に「パピプペポ」の濁音で、今日の「ハヒフヘホ」の濁音で無いことは、前からの說明で明かなことゝ思ふ。

さてこゝに讀者は、本講義の一〇六頁に立ち返つて見られると、「所謂「ウラル、アルタイ」語族の特性の「b」に濁音が清音に後れて發達したといふ一項がある。即ちこの語族に於ては、「ガ」「ダ」「バ」等の濁音（即ちg、d、b）は、其前に存在した清音「カ」「タ」「パ」（k t p）から發達したものであるといふことで、これはこの語族のいろ〳〵の側から考究してたてられた理論で、今茲にちよつと述べることは難いが、しかし今之を眞理とすれば、恰もP音の考にあてはまる。今日の國語に「パピプペポ」があることは明かな事實で、既に之があり、而して濁音は清音に後れて發達したものとすれば、我古言に「パピプペポ」に對する清音「パピプペポ」が存在したといふことは爭はれない事實とな

るのである。今日では「パナ」(花)は連濁で「クサパナ」(草花)の如くなるが、この「パナ」の發達するためには、其前の時代にこの「パ」と全く同位地で同じ方法で生ずる清音「パ」がなければならず、即ち今日の「パナ」は、古くは「パナ」で無ければならぬわけであります。古く「パナ」であつたればこそ連濁の場合に之に聲帶の振動が加はつて濁音「パナ」は生じたのである。喉部の摩擦音で、「パ」とは發音の位地もちがへば音の出方も全く反對な「ハ」(h)からして、どうして「パ」が生じて來ることが出來ましやう。「ハナ」の古音が「パナ」であつたればこそ「パナ」も出來たのであり、その「パナ」が後世に到つて「ハナ」と變化して來たのであります。尤もある場合には、他の類推からのために「h」から直接に「b」にかはつた場合もありましやうが、それらのこまかい事は暫く措いて、兎も角「b」音に先立つて「P」音が存在したこと、及びそれが後世に到てh音にかはつたことの理論はたちます。

第二、h音が古い音で無いことの考へ。

Pが古音であると共に、h音は後世の發達で、古い音で無いといふことが證據立てられます。それは漢語の「h」の音を、我古人は假字に書く時に「ハヒフヘホ」を用ゐないで、みな「カキクケコ」を用ゐて居ることで明かに推論されるのであります。一例をあげてみますれば、「漢」は「ハン」、「鶴」は「ハク」といふのが原音である。それをわが國で「カン」「カク」といふやうに書き又た發音して居ります。「原音が「ハン」「ハク」であるならば、「ハン」「ハク」と書いたらよさそうなものを、古人は何故「カン」「カク」と書いたか。こゝが考へ處で、これは我古人が始めてこの漢音のhを假字に書きあらはす時分の我「ハヒフヘホ」は、決してhahihuhehoと發音されたものでなくて、papipupepoが何か、他の音であつたといふことを證明します。なほ詳しくいへば、喉部の摩擦音たるh音を聞いた古人は、之をうつすべき假字が無いため、やむをえず之に最近い喉部の密閉音k(カ行)の字をかりて「カン」「カク」といふやうに寫したものに相違ありませぬ之によつてみてもh音はわが國の古い音で無くて、なほ進では「ハヒフヘホ」は今日のやうに「ha」「hi」等の如く發音されたもので無いことは明かである。なほこの點は梵語即悉曇と之を音譯した漢語とを對照するとすぐわかる。次の諸語を御覽なさい。

漢語	漢語	漢語	漢語
悉曇	漢語	漢語	漢語
ahaha	嚇嚇嚇	hami	哈密

arahâu	阿羅漢	羅漢
maha	摩訶	摩訶羅
hasara	鉢羅	鉢羅

第三、アイヌ語にはいつた日本語のこと、

現今の北海道の土人、古くはわれ〳〵大和民族の前代の國民であつた「アイヌ」人種の言語の中には、多く日本語がはいつて居る。その輸入された日本語をみると、今日吾人が「ハヒフヘホ」の音は、みなPの音であらはれて居る。「アイヌ」語にはpもhもfもみな存在して居るのであるから、日本語を輸入する場合に、hをPにかへるといふやうなことは無く、そのまゝにはいつたにちがひ無い。してみると、これらの日本語が「アイヌ」語にはいつた當時は、今日の「ハヒフヘホ」はまだhでなくて、p音であつたことを推すことが出來る。今その例を示してみると、

アイヌ語		アイヌ語	
Pachi	針	Pera	唇
Pekere	光	Pone	骨
Puri	振	Pashui	箸

Panchi　罰

第四、熟語及び方言上の證左。

熟語、即ち二ケ以上の語が結び合はさつた復合（コムパウンド）語の中に、古い形態や古い音が保存されることは、今日の言語學の證明するところとして、前來度々述べた處であつた。（五六、五七頁等）一般には今日は既にh音に變じて來たPの古音が、熟語の中に遺つて居るものが多い。「ナッパ」（菜葉）「トーッパシル」（遠走）の類多くあることも、既に復合語の説明の條下に説いたが、其他「すッぱい」「おこりッぱい」「おこりッぽう」の類はどうであるか。「ぱい」は「はゆき」、「ぱい」は「おほき」、「ぱう」は「ひと」で、これが熟語として古音を保存しつゝ俗語の上に遺つて居るのである。尤も熟語の中のP音には、他の同一の場合の類推から後に發達したので古音を保存するのでは無いものもあらうけれど、兎も角、今日のhが古くPたることを示すには十分である。

次に方言上の證據であるが、これをとく前に、まづ古いP音が今日のh音にうつる階段を見なければならぬ。Pは唇部の密閉音であり、今日のハ行音hは喉部の摩擦音であり、音の出方及び性質が全く異つて居ることてPが一足とびにhにうつる

といふことは、ある特別の場合を除ては、一般の聲音變化の上に正則的に起りうべき現象では無い。故にpがhに移るには、pがhに近づくその間に、必ず階段を形づくる音がなければならぬ。云ひ更へれば、pがhにうつる前に、まづ一度移つた音がなければならぬ。その階段の音は、則ち今日の「フ」音の子音たるfの音である。fは唇部の摩擦音であつて、唇部といふ發音の位地の上ではP音と同じく、摩擦音といふ音の性質の上ではhと同じである。Pがhに變化する前には、一度このf音に變じたものであるので、「ハ」行の四音は悉くh音となつたのに、「フ」だけれは其母音「ウ」のために古いf音を保存して居るのである。(一七一頁)さて一國の地方僻陬の言語が、多く其國の古言古音を保存することは、また今日の學問の證明するところで、これは大都會の言語は、交通の頻繁錯雜なために、常に他の地方の言語の影響をうけ、錯雜して變化に富んで居るが、地方僻陬の言は之と異つて、他の言語の影響をうけないためである。而してこの場合に於て、われ〳〵東京人がhに發音する「ハ」行音を、f音に發音する地方が今も多くあつて、「ハナ」を「ファナ」の如くいふのは東北地方一般のことである。これは即ちhの古音fが保存されて居るものに外ならぬ。

かやうな四ヶ條の見方から、上田博士は、今日の「ハヒフヘホ」は實に我古言に於ては「パピプペポ」であつたといふことを論結せられたのである。かくなれば本居翁を始め從來の國學者が、「パピプペポ」を後世外國語などの影響のために我國にはいりこんだ卑俚不正な音であるとし、之に半濁音などゝいふ汚名を負はせた考へは、全くの誤謬であつて、Pは實に我國の聲音であり、「ハヒフヘホ」が却てそれから變じて來た後世の音であることが明かとなつたのである。我國聲音の歴史は、その語典のすべての方面と共に、未だ多く考究の中にあるが、その研究はいかなる方法によつてなすべきものであるかの例として、この一項を示したのである。

概括

要するに、人の言語の上に用うる聲音、就中自國語の音韻組織に關する精密の論は、聲音學として特別の科學の問題であつて、文典の上の聲音論は、其の聲音學の側で研究しあげられた結果によつて、大躰を叙述するので十分である。聲音變化のこまかいこと、その分類や原理の論も、また聲音學と言語學との範圍に論ぜられることである。だゝ聲音の論は文典の上には全く之をしないといふ論旨は兎も角として、

苟も之をする以上は、舊來のわやまつた見解は之を改め正して、新らしい學問の見方に從はねばならぬ。殊に近來歐洲の語學界における文法學の傾向は、實用の側でも、研究の側でも、最も重きを聲音の論に置くことゝなつて居る。聲音は言語の要素で、その學問は語學の基礎をなすものであるから、この點の考への正しくない時には、文典の他のすべての部分に誤解を生ずることゝなるのである。

以上聲音の極めてあらましの論に於て、注意すべき點を概括すれば、次の諸項があります。

1、母音と子音との區別
2、清音と濁音との區別
3、半母音とは何であるか
4、半濁音といふ名稱の不當なこと
5、促聲又は促音とは何か
6、拗音とは音の脣化及口蓋化といふことであること
7、拗音の假字にて示された音には單純なものもあること
8、一ヶの假字で二種以上の音の示されたものゝあること
9、鼻音とは何であるか及び其種類
10、之を示すべき假字の無い音類が國語の上に存在すること
11、喉音三行の辨のこと等

第四章　文字の論

聲音の論のつぎには、自然、文字の論が來る。國民が其國語の音をかきあらはすために用うる文字はいかなるものがあるかのこと。又たその文字を、いかにくみあはせて音を示すかのこと。言ひ更へれば、文字の形態及綴字の法則と、その種類並びにその歷史的發達が、本論に於て考究すべき問題である。

我國の文字としては、いふまでもなく、眞字、漢字、片假字、及び平假字の四種があり、その片假字平假字を假字と呼び、之に正體と變體の二類がある。眞字は又た眞假字又は萬葉假字といつて、假字の未だ發達せぬ前に、漢字をかりて國音をうつしたもので、假字の發明があつて後は、特別の場合の外は用ゐられぬ。漢字は支那語の輸入と共に、主として之をうつすために用ゐられたものであるが、その擴布と共に、純粹の

國語も常に之によつて寫し、中世以來今日に到るまで、概していへば我國の文字は漢字であつて、假字は單に之を助けるための第二次的の文字にすぎないといふのが適當である。しかし我國人がともかく獨立に(其本源は問はず)發達した文字は假字であるから、國語文典の文字法に於ては、漢字よりは寧ろ主として假字を取り扱うのである。

假字の種類に就ては、いまこゝに詳しくのべるまでもありませぬ。漢字をそのまゝかりて、其音訓によつて、國語をうつすの用にたてたものが、萬葉假字又は眞字(まな)で、其用ゐられた時代も可成ながゝつたでありましやう。しかるに時をへてその用ゐの多くなるに從て、畫の多い漢字を用うることの不便が一般に感ぜられるやうになつて、こゝに漢字を簡畧にして用うることが起つて、これが二樣の方向をとつた。即ち一方には漢字の草書躰をなほ一層くづして用うることから草假字即平假字は發達し、一方には漢字の偏傍をとつて用うることから片假字は發達して來ました。その始めの間は、各人がみな勝手の畧し方くづし方をやつて居て、まち〳〵であつたらうが、文學の普及に伴ひ、假字の用ゐの廣くなると共に、草假字片假字共に多少

一定の形をとるやうになり、之を習うやうになつてからは、愈きまつた形態となり、其外のものは變體として取り扱はれるやうになつた。かやうに我假字の發達は、自然の要求に應じ、時をへて發達したものであるのを、之を具備とか空海とかいふ一二人物の製作であるとすることは、全然不自然のことであります。勿論これらの偉人が、假字の普及の上に大なる効績のあつたことは勿論でありましやうが、それを一時にその人の手で出來たとするのは謬見で、時をへ人を逐て歴史的の發達をしたものに外ならぬ。それはともかく、假字の發達は奈良朝の終から平安朝の初期にかけ、即ち西洋紀元の七八世紀の交にあつて、これが平安朝文學の隆盛を極めるもとゝなつたのであります。

假字の字源、即ち一の平假字又は片假字がいかなる漢字から來たかのことは、古來の學者によつて大抵調べられたが、まだその確かならぬものも少なからずある。それからまた所謂神代文字の論も久しく國語學者の間に反覆された。即ち漢字のいまだ輸入されざる前に、既に神代から我國には文字があつたといふ說で、在來の國語學者は多く之を主張して、國體の精華といふ點に附會しやうとしました。又たあ

る學者は、その多くが朝鮮文字の變體であると說くものあれば、或は又た後世の僞作として一概に排斥し去る者もありました。今こゝにはたゞ假字に關する古來の重要な著書だけを紹介して、學者の考究におまかせしやうと思ふ。假字に關する著書のまづ擧ぐべきものは、新井白石の同文通考四卷で、白石の沒後白蛾が增補して寶曆十年九月に出版になつて居る。この書は漢字の種類發達から說て、わが假字文字に及んで、三音神代文字の論等にも入て居る。文字に關する著書として纏まつたものは、まづ同文通考が始めてゞあつて、後世の文字に關する著述はみなその系統をこの書に有つて居ります。之に次では伴信友の假字本末で、上卷二冊下卷一冊附錄一冊と都合四冊で、嘉永三年に出版されて居る。片假字草假字神代文字に就て起源を考證したものであります。それから近くは榊原芳野の文藝類纂中に文字の考證がある。其他假字に關する書類は、寫本で片々たるものが多くあるが、何れも上述の二三著をぬき書きしたやうなもので、見るに足るものはない。これらは假字一般であるが、次に重に神代文字に關したものでは、平田篤胤の神學日文傳、鶴峯戊申の神代文字考、野々口隆正の神字原、落合直澄の古代文字考などが重なもので、なほ近く

は東洋學藝雜誌の上に「チェムバレン」、國光の上に田中賴庸氏等がこの點に論じて居ります。これらの著書により、支那の文字に關する著書を集めて、かの自然界事物の繪畫にすぎなかつた象形文字から、音をうつす高等な假字文字が發達して來る經路を調べるのは最趣味のあることであります。漢音によつたのもあれば呉音によつたのもあり又た訓をとつたのもあること故漢字の音の側にも考へを有つて行かねばならぬこと無論である。

文字の字體のことはこの位にして、直ちに假字遣のおはなしに入ります。今日まで用ゐられて居る我國の文字法、即ち國語假字遣は歷史的であります。假字遣が歷史的であるとはどういふことかといへば、既に讀者の知らるゝ通り、言語の音はたえず變遷をするものであるから、之をうつす文字も時代を逐て用方がちがうやうになる。それを今日現在の發音にはかまはず、古い時代の假字の用ゐ方に從て書いて行かうといふのが、即ち歷史的假字遣である。そもそも漢字が始めて輸入されて、之によつて國音を寫した古い時代には、人は自分の發音する通り文字を用ゐて、即ち文字と發音とは一致したにちがひない。あは(粟)とあわ(泡)と、たえ(絶)とたへ(堪)とを書

きわけたのは、當時の人の發音がかやうに分れて發音したからに外ならぬ。それが時をふるに從て、發音の變遷が起り、粟も泡も絕も堪も均しく「アワ」「タエ」と發音するやうになつては、人々は特別に習はなければ「あは」と「あわ」「たえ」と「たへ」とを書きわけることが出來ぬやうになり、或人は自分の發音通り粟も泡も「あわ」とかけば、或人は古人の方法に從て之をかきわけるといふやうに中世の頃に於て國語の文字法は混亂の域に陷つたものである。それを概して考證を古書の上に求め、古人の文字法を探求して、正確なる歷史的假字遣の基礎を置たものは、即ち釋契冲の和字正濫抄である。

契冲は國語學の興祖で、その正濫抄は後世斯學の發達する基礎を置いたものである。五卷あつて元祿六年に出來、考證を日本紀から三代實錄に至るまでの國史、古事記、萬葉集、新撰萬葉集、古語拾遺、延喜式、和名抄其他の古書を材料として、正確なる土臺の上に歷史的假字遣の基礎を置いたのである。この正濫抄の土臺の上に、假字遣を敍述し、一々の場合の出處をあげたのが、即ち楫取魚彦の古言梯で、この書は明和元年に集め終つたといふことである。古言梯は其後清水濱臣田中延香村田春海等

が之を增補訂正し、終に弘化三年に山田常助增補の古言梯があらはれて、歷史的假字遣は完成の域に達したのである。之を要するに、今日われ〳〵が國語假字遣として遵守する歷史的文字法は、契冲によつて基礎をおかれ、魚彦が之を大成したものであつて、つまり寫音的文字法の唱へられる廿世紀まで、三百年の學界は、文字の上に正濫抄の支配を受けたのであります。

國語假字遣に對して字音假字遣がある。字音假字遣は、既に今日の初等敎育では用ゐられぬことになつたけれど、其原理の大躰は知らねばならぬ。字音假字遣といふのは、古代及び中古時代に於て我國人が假字を有つて漢字の音をうつしたその法則である。初めて我國人が假字を用ゐて漢字の音をうつした時分には、彼の音で我文字の之にあてる適當のものゝ無いのがあつて、その時には之に近い音の文字をかりてうつしたと見へる。例へば彼國の鼻音をわが母音の假字でうつした類で、「東」は原音 tong であるのを「トゥ」とかき、陽は原音 Yang であるのを「ヤゥ」と書いた類、又た清は漢音「セィ」呉音「シャゥ」と書く、これは原音は seng siang であるが、かやうに我國の字音假字なるものは、決して原音をこまかくうつしたものでなく、極めて粗末なものである、字

14
229

音假字遣のはじめて定められたのは、本居宣長翁の字音假字用格で、安永四年の序がある。その後字音に關する著書も出たけれど、要するに學者がすべて音韵殊に漢語の聲音に對して正しい考へを有つて居らなかつたゝめに多くの點で誤謬に陷て居る。字音假字用格の讀者は同時に本居翁の地名字音轉用例を御覽になるがよろしい。

國語學完

京城帝國大學圖書館藏
파ㅜ79

終